

短期大学における音楽アウトリーチ活動の可能性 - 日独親善交流音楽会での実践を通して -

著者	藤山 あやか
雑誌名	紀要
号	21
ページ	(65) - (75)
発行年	2019-03-20
URL	http://doi.org/10.32125/00000040

短期大学における音楽アウトリーチ活動の可能性

－ 日独親善交流音楽会での実践を通して －

The possibilities for music outreach in Junior college

- A practical report of Japan-Germany friendship exchange concerts -

藤山あやか

Ayaka TOYAMA

要旨

本稿は、平成 30 年度滋賀文教短期大学地域連携事業の一環として実施した「日独親善交流音楽会」の取組における成果と課題をまとめた実践報告書である。当音楽会は、ドイツより招聘した音楽家および国内音楽家と本学学生らとの共演により、地域における芸術文化の振興を図ることを目的として実施した。また、アウトリーチ活動の一つの指針として、教育現場と連携した取組の成果を示すと同時に音楽を通じた異文化交流を行うことで、今後の地域社会と大学における音楽教育の展開を示唆している。

Abstract

This report is a practical report summarizing the outcomes and issues in the efforts of the "Japan-German Friendship exchange concerts" as a part of regional collaboration project at Shiga Bunkyo Junior College in 2018. These concerts were held for the purpose of promoting regional culture by mean of the collaboration among musicians invited from Germany, Japanese musicians and our college students. Further it is suggesting as a guideline for outreach activities, the futuristic sublimation of the music education in the community and the university by showing the results of efforts in cooperation with the educational site and intercultural exchange through music.

キーワード: アウトリーチ活動・音楽教育・地域連携・民族楽器

Key Words: Outreach, Music education, Cooperation with regional community, Folk instruments

滋賀文教短期大学は、地域連携事業として近隣の保育所や学校または行政と連携し、ボランティア活動や子育て支援など地域の課題解決に貢献するための多様な教育活動を展開している。特に、教育現場と連携した事業においては、地域における教育の充実を図ることを目的とし、保育現場と連携した共同研究や学校教育現場でのボランティア活動、本学留学生との交流を通じた国際理解授業を行なっている。本学は、教職課程として保育士養成コースと小学校教諭養成コースを有しており、2年間という限られた期間の中で学内外における様々な事業に取り組むことで、実際の現場に対応できる学生の実践力

育成を目指している。また、地域に根ざした大学として教育・研究活動の成果を地域に発信し、さらには多文化共生という視点において地域社会の活性化と発展に貢献することで、行政と教育現場および大学が連携する有機的な繋がりを構築している。

本稿では、当該事業の一環として実施した「日独親善交流音楽会」を音楽アウトリーチ活動として位置づけ、その成果と今後の展望について考察する。

1. 音楽アウトリーチ活動の実際

音楽におけるアウトリーチ活動は、音楽家が学校教育現場や社会福祉施設など様々な場所で訪問演奏を行うことを指し、教育普及活動や芸術普及活動として位置づけられている。

これらは、主として個々の音楽家やNPO団体などが企画・運営を行い多様な形態での活動を展開している。大学での実践事例では、2001年度より神戸女学院大学音楽学部が授業として始めた「音楽によるアウトリーチ」があげられる。この取組は、大学が地域と密接な関係を持ち展開する教育活動として、芸術文化の発展および活性化に寄与するとともに、学修成果を地域社会に還元する機能を果たしているといえる。昨今、教育学部を有する大学においても、音楽文化事業に留まらずキャリア教育の一環としてカリキュラムに組み込んでいるケースが見受けられる。さらに、学校教育と連携したアウトリーチとして、音楽科教育の中で音楽家を外部講師として招いた授業を継続して行うなど多様な実践が成されており、組織的な取組を推進し普及していくことが期待されている。

アウトリーチ活動は様々な特性を持ち、齋藤(2013)はこれらを「鑑賞系」、「創造系」、「技術指導系」と大きく3つに分類している。本音楽会は保育所から大学まで様々な校種で全4回開催し、内容は対象者とその目的に即した形態で実施した。これらのプログラムは多岐にわたり、全ての活動において複合的な内容を含んでいるが、特に聴衆者が演奏の一部に参加する「鑑賞系(参加型)」に着目してプログラムを構成した。

ここでは、4つの活動内容について概観し実践報告を行うと同時に、短期大学における音楽教育のアウトリーチの有効性について考察する。

2. アウトリーチ活動の実践を通して

2.1 「日独親善交流音楽会」の概要

2018年10月に、滋賀文教短期大学の主催として4つの会場で開催した。本学と地域社会が連携して行う実践的教育活動として、教育現場における音楽活動の展開の

可能性を示すとともに、音楽を通じた多文化理解を図ることを目的として実施した。

写真1: 日独親善交流音楽会チラシ(10月2, 3日開催案内)



出演者は、ドイツより招聘した音楽家2名を含む国内外の音楽家7名¹で、開催場所により本学学生や児童・生徒との共演を試みた。国内の音楽家4名は、著者が在籍していた愛媛大学教育学部音楽講座の教員と管楽器研究室に所属する学生らを招聘した。当研究室では、愛媛県内の教育現場や社会福祉施設において、学生らが主体となり積極的なアウトリーチ活動を行なっている。今回は、県外の教育課程に所属する学生と協同して企画・運営に携わることで、互いの専門分野を活かしたアプローチを試みることができた。これは、大学間連携に基づいた教育活動として双方の高等教育機関の充実および発展に寄与する取組であり、学生の主体的な学びと実践力を培うことができる連携事業として、今後推進すべき実践活動であると考えられる。

以下、「日独親善交流音楽会」の全行程と、その概略を示す(表1)。なお、表中の参加人数は対象者の人数を表す。

¹ ピアノ1名、フルート2名、クラリネット2名、ホルン1名、ファゴット1名の編成で行なった。

表 1：日独親善交流音楽会のスケジュール

日程	時間	場所	内容	対象	参加人数
10/1 (月)	16:00～18:00	滋賀文教短期大学	共演学生との練習	小学校教諭養成コース2年生	5名
10/2 (火)	8:00～9:20	長浜市立杉野小・中学校／音楽室	共演学生との練習	小学校教諭養成コース2年生、よし笛アンサンブルメンバー	12名
	9:40～10:30	長浜市立杉野小・中学校／音楽室	音楽会	全校児童、地域住民	43名
	15:00～18:00	滋賀文教短期大学	共演学生との練習	共演学生・職員(管楽器演奏者)	6名
10/3 (水)	9:00～10:15	滋賀文教短期大学／体育館	共演学生との練習	子ども学科2年生、共演学生・職員(管楽器演奏者)	55名
	10:45～12:00	滋賀文教短期大学／体育館	音楽会	本学学生・職員、地域住民	284名
	13:30～14:00	社会福祉法人石龍会 チャイルドハウス／教室	訪問演奏	園児(4歳児クラス)	35名
	15:00～15:20	長浜市役所	長浜市長表敬訪問	長浜市長、市役所職員、本学職員	5名
	16:15～17:00	本学学生との交流会	学生食堂	本学学生・職員	23名
10/4 (木)	9:00～10:00	岐阜第一高等学校／体育館	共演生徒との練習	共演生徒・教員	25名
	10:30～12:00	岐阜第一高等学校／体育館	音楽会	全校生徒、保護者	780名

2. 2 長浜市立杉野小・中学校での実践

長浜市立杉野小・中学校は、滋賀県長浜市木之本町杉野に属する全校児童生徒 17 名²の小規模校である。杉野地区は長浜市の東北部で、岐阜県斐川町との県境にある山間部で杉野川の流域に位置する。

明治期には杉野村として存在したが、1954 年に木本町と合併し 2010 年に長浜市に編入された。市内の全ての地域において人口減少が見られているが、特に杉野の地域圏では人口減少が顕著であり、現在、杉野の人口総数は 276 人³と過疎化が進んでいる。

同校は 1929 年、杉野村立杉野高等小学校として創立され当時は 2 つの分校⁴を有していた。1954 年、町村合併により木本町立杉野小学校となり、児童・生徒数の減少に伴い 1992 年から 1993 年にかけて文部省へき地教育研

究校に指定され、2002 年には小中併設校となった。地域外への人口流出が続く一方で、学校教育の一環として「ふるさと学習」や「にこにこ訪問」など、地域の方との交流活動を積極的に行い地域活性化に努めている。「ふるさと学習」は小学校 1～4 年生の生活科に位置づけ、地域と関わりを持つ教育活動として実施している。全校児童を対象とした地域学習では、地域住民を講師として招き、田植えや稲刈り等の体験学習を通年で行なっている。さらに、茶道体験を小学校 1 年生～中学校 3 年生の 9 年間にわたり実施し、自治会の会館で実施する学校行事「にこにこ訪問」で地域の高齢者の方にお茶を振るまうなどして交流を深めている。このように、地域と密接な関わりを持ちながら教育課程を編成しており、「コミュニティの中核として地域の活性化に貢献する学校」の

² 在籍児童生徒数，小学校 9 名 中学校 8 名，2019 年 1 月 23 日現在

³ 長浜市「人口と世帯数」，<https://www.city.nagahama.lg.jp/0000005858.html>，2019 年 1 月 8 日現在

⁴ 1966 年 1 月 土倉冬季分校廃止，1972 年 1 月 音羽冬季分校廃止

役割を果たしている。さらに、県内外の大学と連携を図りながら小規模校・小中併設校の利点と地域性を活かした特色ある教育活動を展開している。

本学との連携においては、2017 年より運動会のボランティアや授業実践を通して、学生の実践力育成およびへき地教育の充実を目指した取組を行なっている。同校では、科目に応じて異学年での合同学習を取り入れており、音楽の授業については1～3年生、4～5年生の複式クラスで授業を行っている。また、全校音楽として毎週木曜日の朝に「歌声活動」を取り入れるなど異学年交流を推進した教育を行っている。

当音楽会は全校音楽の枠組みで実施し、教育現場との連携による取組として、音楽を通じた日独文化交流と地域における芸術文化の振興を目的として実践した（写真2）。また、音楽会のみならず、互いの文化を学び合う機会として給食の時間を子どもたちと一緒に過ごし、音楽家との交流を深めることができた。

写真2：滋賀夕刊新聞記事⁵



プログラムの概要

杉野小・中学校の実践では、本学小学校教諭養成コース2年生5名が企画・運営に関与した。プログラム構成として、一部曲目で子どもたちとカスタネットや鈴など

簡易楽器を用いての即興演奏や合唱で共演する「参加型」を重視した内容とした。音楽室での実施であったため、演奏者と聞き手が近い距離でコミュニケーションを取りながら進行することができ、地域の方も含め会場全体が一体となった音楽会をつくることができた。

表2：長浜市立杉野小・中学校プログラム

曲目と内容	編成	共演
アルプホルン独奏	アルプホルン	
管楽器の紹介	フルート、クラリネット、ホルン、ファゴット	学生
よし笛レクチャー	よし笛	よし笛演奏グループ
ふるさと 作曲：岡野貞一	合唱、よし笛 13、ピアノ、フルート、クラリネット 2、ホルン、ファゴット	学生（よし笛）、児童（合唱）、よし笛演奏グループ
世界がひとつになるまで 作曲：馬飼野康二	合唱、ピアノ、フルート 2、クラリネット 2、ホルン、ファゴット	学生、児童（合唱）

まずは、スイスの民族楽器アルプホルンでオープニング演奏を行なった（写真3）。アルプホルンは、アルプス地方などの山地の住民により演奏される楽器で、マウスピースを使用して唇の振動で音程を変化させ自然倍音のみで演奏する金管楽器の一種である。楽器紹介のコーナーでは、小学校音楽科における器楽の学習内容と関連づ

写真3：アルプホルンの演奏風景



⁵ 滋賀夕刊「ドイツから、心に残る音楽」, 2018 年 10 月 2 日, 夕刊 1 面。

ける一方で、教科書には掲載されていない管楽器の同属楽器についても実演を通して説明した。ここでは、長さの異なる2種類のクラリネット(B♭管、A管)、ファゴットの同属楽器「ファゴッティーノ」、「コントラファゴット」を紹介し、普段は触れることのない楽器の特性や奏法についてより理解を深めることができた(写真4)。

写真4: ファゴッティーノの楽器紹介の様子



さらに、滋賀県近江八幡市発祥の民族楽器「琵琶湖よし笛」を用いた曲目を取り入れ、地元で活動するよし笛の演奏グループをゲストとして招き共演した。

琵琶湖よし笛は1999年、近江八幡市出身の菊井了(1947-)によって考案された楽器である(写真5)。原材料は琵琶湖の内湖「西の湖」の葦(よし)⁶で、制作者が琵琶湖の自然環境保全を考える取組として、1998年より自然の原理と風合いに徹し楽器開発が行われた。

全長約25cmで管の太さは11~13mm、重さは約15gで穴数が7つのF管の縦笛である。基本ピッチを442Hzとし、音域はF⁴~D⁶の2オクターブ半を出すことができる。音響学的には「気鳴楽器」に分類され、歌口には竹製のマウスピースが装着⁷されており、リコーダーのように息を吹き込むだけで容易に音を出すことができる。

写真5: 琵琶湖よし笛



2006年に設立された「日本よし笛協会」をはじめとし、現在は様々な団体や演奏グループが琵琶湖よし笛の普及活動に努めており、葦を育む自然環境保全に関する活動は県内のみならず全国各地に拡がりを見せている。このようなふるさとの環境保全の課題は、地域の実態に即した教材を取り上げて取り組むことで地域づくりへの理解が深まると考える。

琵琶湖よし笛を用いた演奏には、小学校音楽科歌唱共通教材「ふるさと」を選択し、本学学生はよし笛の演奏に加わった。参加した児童や地域住民は合唱で参加し、ピアノ、管楽器、よし笛、合唱と大編成で演奏を行なった。

写真6: 「ふるさと」の演奏風景



⁶ 植物学上の「イネ科」「ヨシ属」に分類される。以前は「アシ」と呼ばれていたが、「悪し」と同音であることから「善し」に通じる「ヨシ」と呼ばれるようになった。

⁷ 竹製のマウスピースを装着したものを「菊井式よし笛」と呼ぶ。この方式は、日本のよし笛の公式基準楽器として定められており、現在、公式認定されている制作者は9名存在する。

本活動の中で琵琶湖よし笛の演奏を取り入れたことは、音楽鑑賞の中に「ふるさと学習」を位置づけた教科横断的な視点に立ったアウトリーチの実践であるといえる。さらに、将来教員を目指す学生にとっても、我が国の音楽や郷土の伝統音楽へ関心を持つ機会として、また、地域や学校教育との連携を取り行う現場での実践を通じて、多角的な視点から音楽教育のあり方について考察を深めることができたと考える。

2. 3 滋賀文教短期大学での実践

本学が立地する長浜市は、1959年にドイツ・アウグスブルク市と姉妹都市提携を結んでいる⁸。姉妹都市提携は今年で60周年を迎え、提携を結んで以降、親善使節団の派遣や受け入れを行うなど積極的な国際交流を推進している。今後のさらなる日独親善交流の発展に寄与すべく長浜市長を表敬訪問し、当該事業の活動報告を行うとともに、ドイツより招聘した音楽家らとの交流を深めた。

本学で開催した音楽会は、本学学生をはじめ、本学のカルチャー講座やボランティア講座に参加する受講生、近隣の保育所「チャイルドハウス」の園児や地域住民が参加した。

写真7：園児らが参加した第一部の演奏風景



写真8：「日独親善交流音楽会」プログラム⁹



プログラムの概要

本学の実践では、チャイルドハウスの園児が一部のみの参加であったためプログラムを二部構成とした。一部は、童謡など子どもたちに馴染みのある楽曲を中心に、二部は木管五重奏曲とピアノ五重奏曲を選曲した(表3)。

学生との共演曲として、一部の最後に「世界がひとつになるまで」を演奏した。合唱には、子ども学科保育士養成コース、小学校教諭養成コース2年生約50名ほか、管楽器に本学学生および教職員有志が加わった。学生らは短期間ではあったが当日まで練習を重ね、本番前の練習では、言葉を介さずとも表現できる音楽をツールとして海外の音楽家とコミュニケーションを図る姿が見受けられた。これらの共演体験や実際の生演奏に触れることにより、音楽の楽しみや喜びを享受できる素養を高めることができたといえる。

⁸ 長浜市高月町出身でヤンマーディーゼル株式会社創業者の山岡孫吉氏と当時西ドイツ総領事により提携された。

⁹ 長浜市立杉野小・中学校および滋賀文教短期大学開催のプログラムである。

表 3： 滋賀文教短期大学プログラム

曲目と内容	編成	共演
第一部		
アルプホルン独奏	アルプホルン	
管楽器の紹介	フルート、クラリネット、ホルン、ファゴット	小学校教諭養成コース2年生
世界がひとつになるまで 作曲: 馬飼野康二	合唱、ピアノ、フルート3、クラリネット4、アルトサクソフーン1、ホルン2、ファゴット1	子ども学科2年生(合唱)、学生有志・教職員(管楽器)
第二部		
木管五重奏 歌劇「魔笛」より夜の女王アリア 作曲: W. A. モーツァルト 編曲: 市川克明	フルート2、クラリネット、ホルン、ファゴット	
ピアノと木管楽器のための五重奏曲 変ロ長調 第1楽章 作曲: ニコライ・リムスキー＝コルサコフ	ピアノ、フルート、クラリネット、ホルン、ファゴット	

第二部のピアノ五重奏曲は、普段演奏される機会の少ない編成である「ピアノを含む小編成管楽アンサンブル」のレパートリーから、ニコライ・リムスキー＝コルサコフ Nikolai Andreyevich Rimsky-Korsakov (1844-1908) の「ピアノと木管楽器のための五重奏曲 変ロ長調 第1楽章」を演奏した(写真9)。これらのレパートリーは、三～六重奏に分類すると約 130 曲の楽曲があるが、未だ知られていない楽曲も多く存在する。演奏人口の多い管楽器とピアノの編成により演奏することができ、今後、学校現場における部活動や音楽愛好家のレパートリーとして用いられることで当該分野の普及の一助とするため選曲した。

写真 9： 第二部のピアノ五重奏曲の演奏風景



演奏会終了後は、学内の学生食堂で音楽家と学生との交流会を企画し親睦を深めた。本学における一連の活動は、教職課程に在籍する学生が次世代を担う教育者として幅広い視野を持つきっかけとなり、国際交流の進展に繋がる教育活動として例示できたと考える。

写真 10： 滋賀中日新聞記事¹⁰



2. 4 社会福祉法人石龍会チャイルドハウスでの実践

チャイルドハウスは、本学と同じ長浜市田村町内に位置する保育所である。同園とは、「長浜市民間保育所協議会と滋賀文教短期大学との協力に関する連携協定¹¹」に基づき、本学との連携授業や園見学など日頃より交流を行なっている。保育の中で積極的な音楽活動を取り入れ、年間行事の中には5歳児による幼児音楽フェスティ

¹⁰ 滋賀中日新聞「日独奏者 奏でるハーモニー」, 2018年10月4日, 朝刊14面。

¹¹ 相互協力の充実等により当該事業の円滑かつ効果的な実施に資することを目的としている。平成30年度は長浜市内私立保育所13園と協定を結び様々な事業を行なっている。

バル、運動会での鼓笛隊などが組み込まれている。鼓隊や和太鼓は専門講師が指導にあたり、入園時より発達段階に応じた体系的な音楽活動が計画されている。

プログラムの概要

同園での実践は、本学音楽会に参加した4歳児を対象とした。子どもたちは、滋賀文教短期大学で開催した音楽会で既に演奏を聞いているため、ここでは実際に楽器に触れながら、より身近に生の音楽に触れる体験活動を重視した。ゴムホースで制作したホルンなど手作り楽器を用い、それぞれの楽器の仕組みや音の出し方などを実演を通して紹介した。

写真 11: クラリネットの構造を紹介する様子



教室で実施したため、音楽家と子どもたちが近い距離で、対話を通したプログラムを進行することができた。馴染みのある曲は一緒に歌い、カホンを用いたリズム遊びを行うなど曲に合わせて一部演奏に加わる体験コーナーを設けた。今回は、楽器紹介を中心とした30分程度の活動ではあったが、子どもたちは初めて見る楽器に興味を示し、訪問演奏を通じて音楽家との交流を深めることができた。この取組は、学校教育現場のみならず保育現場においても、大学との連携により広がる音楽活動として一つのモデルを示す事例となったといえる。

2. 5 岐阜第一高等学校での実践

岐阜第一高等学校は、岐阜県本巣市に位置する学校法人松翠学園の私立高校で、滋賀文教短期大学の系列校である。1957年に男子校として創立され、オリンピック選手やプロフェッショナルとして活躍する選手が輩出されるなど、特にスポーツ界において大きな成果をあげてい

る。2016年に男女共学となって以降も、男女ともに部活動が活発に行われ、全国高等学校総合体育大会へ出場するなど各種大会で優秀な成績をおさめている。さらに、タイ王国、オーストラリア、大韓民国、カナダ、モンゴルとスポーツを通じた親善交流や姉妹校提携を行うなど、積極的な国際交流活動を通してグローバルな視点を持った教育活動を展開している。

学科は普通科と工業科が設置され、カレッジコースやスポーツコース、自動車工学コースなど5つのコースに分かれ各々に特色ある教育課程を編成している。来年度より芸術科の科目編成で音楽が開講予定にあることを含め、当音楽会は大学での学びの一端に触れるキャリア教育の一環として高大連携教育に位置づけて実施した。

プログラムの概要

まず、当音楽会は高大連携教育の一環として「大学での学びを体験する機会および芸術文化についての理解を深める」ことを目的としたため、本番を含めて全4回の講座を開講し技術指導を行った。

講義内容は、音楽会で演奏する合唱曲の練習と共演する管楽器の特性など、音楽の基礎的な知識や技能を体系的に習得できるよう構成し、音楽会を当該プログラムの「学修成果発表会」として位置づけ実施した(表4)。

写真 12: 高大連携教育プログラムの講義風景



表 4：高大連携教育プログラム指導計画

回	日	講義テーマ	習得すべき基礎的、基本的な知識・技能
1	9/10	楽器の仕組みを知ろうⅠ～管楽器～	○様々な楽器の音色や名称について理解することができる。 ○楽器編成と、様々な楽器の特徴（構造や音色、奏法）に興味を持つことができる。
2	9/17	楽器の仕組みを知ろうⅡ～弦楽器ほか～／合唱練習	○様々な楽器編成により生み出される曲想から楽曲の特徴を理解することができる。 ○各声部の役割を理解して、歌うことができる。
3	9/24	合唱練習／まとめ：大学での学びについて（進路支援）	○歌詞の内容や曲想を生かした表現技能を身につけて歌うことができる。 ○大学での学びを知り、進路選択について考える機会をもつ。
4	10/4	音楽会	学修成果発表会（音楽家との共演）

受講者は、全校生徒より希望者を募り 22 名（男子生徒 14 名、女子生徒 8 名）が参加した。生徒の実態に応じた指導を行うため、吹奏楽部の顧問教員と連携を図りながら本番までの運営を行った。合唱曲は、「昂」と「世界がひとつになるまで」の 2 曲を選択し、同校の教員も管楽器奏者として演奏に加わった。「昂」は、同校生徒がタイ王国の提携姉妹校へ訪れた際に、親善交流イベントで披露した曲として思い出深い作品である。今回の日独親善交流を通じて、今後の芸術文化の振興とともに国際交流のさらなる発展を期待し生徒との共演を試みた。当日は全校生徒および保護者が参加し、企画したプログラムの中では来場者数が最も多い音楽会となった（写真 13）。

表 5：岐阜第一高等学校プログラム

曲目と内容	編成	共演
アルプホルン独奏	アルプホルン	
管楽器の紹介（各楽器の独奏曲）	フルート、クラリネット、ホルン、ファゴット	指揮者体験（生徒）

昂 作曲：谷村新司	合唱、ピアノ、フルート 2、クラリネット 2、テナーサックス 1、ホルン 1、ファゴット 1	生徒有志（合唱）・教職員（管楽器）
世界がひとつになるまで 作曲：馬飼野康二	合唱、ピアノ、フルート 3、クラリネット 4、アルトサックス 1、ホルン 2、ファゴット 1	生徒有志（合唱）・教職員（管楽器）
ふるさと 作曲：岡野貞一	ピアノ、フルート 2、クラリネット 2、ホルン、ファゴット	
花は咲く 作曲：菅野よう子	ピアノ、フルート 2、クラリネット 2、ホルン、ファゴット	
木管五重奏 歌劇「魔笛」より夜の女王アリア 作曲：W. A. モーツァルト 編曲：市川克明	フルート 2、クラリネット、ホルン、ファゴット	

写真 13：生徒らが合唱曲で共演する様子



ここでは、主たる目的を音楽鑑賞とした「鑑賞系（鑑賞型）」とするも、高等学校学習指導要領解説芸術編において「表現」及び「鑑賞」の共通事項として示されている「ア 音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きを感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること」に着目したプログラムを構成した。音楽鑑賞の能力を高める手立てとして、演奏形態により変化する音色や音楽表現の多様性に気づかせることをねらいとし、各々の奏者が独奏曲を演奏してその構造や音色、奏法の特徴を紹介した。

音楽科における鑑賞教育では、主体的学びと理解を促す学習の充実を図るため言語活動を取り入れた学習形態の設定に考慮し、一つの題材に対し多様な切り口や方向性から授業計画を立案する必要がある¹²。これは、アウトリーチ活動においても通ずる課題であり、一つの楽曲から多角的なアプローチしプログラム構成することで幅広い音楽活動の展開が期待される。

ここでは、一部生徒との共演体験のほか、管楽器アンサンブルの楽曲で指揮者の体験コーナーを取り入れ、数名の生徒が実際に指揮の経験をすることでその役割を学ばせる機会を設けた。音楽鑑賞において、まずは題材とする楽曲に興味を示すことが主体的学びを実現するための手立てとして重要である。教育現場での実践において「鑑賞型」を軸とするプログラムに関しても、体験活動を取り入れることでアウトリーチ活動の多様性を示すことができ、これらの実践は創造的な音楽教育の発展に繋がると考える。

当該プログラムは、今年度の高大連携教育として単発で実施したが、高大接続の実現に向けて高校の教員との連携を図り体系的なプログラムを構築する必要がある。これは、互いの教育活動の活性化を図る機会として、さらには音楽を通じたキャリア教育の一つとして拡がり期待される活動であるといえよう。

4. 総括

2018 年秋に実施した「日独親善交流音楽会」は、保育所、小学校、高等学校、短期大学など様々な校種間の相互交流を目的とした音楽アウトリーチ活動である。対象者や校種により目的や内容は異なるが、活動形態としては「鑑賞系（参加型）」を念頭に置き、共演体験や聴衆者と対話できる機会を設けたプログラムを展開した。これらの活動では、各々の年代に応じて演奏時間や場所を設定し、ニーズに応じた選曲やアプローチを検討した。

保育現場では、幼児期の豊かな感性や表現力の育成において、生活の中に音楽を身近なものとする環境設定が重要である。また、学校教育においては音楽鑑賞にとどまらず、他教科と関連を持つ題材を設定することで横断

的・総合的な学びの展開が期待できる。さらに、教職課程に所属する学生にとり、教育現場と関わりながら音楽活動に参画することは、創造力の向上が期待できる取組である。このように、音楽アウトリーチ活動は多角的な視点からのアプローチにより活動を展開することが可能であり、地域社会と有機的な結びつきを持ち展開していくことで生涯学習に繋がる教育効果を持っているといえる。

当該事業では、日独親善交流の機会を持つことで、多文化共生教育を視野に入れた活動を展開した。教育現場において、共存社会の形成の実現を目指すグローバル化に対応した教育の展開が求められおり、人と人を繋ぐ表現活動として言葉を介さずとも空間を共有できる音楽は、多文化共生教育の実現に向けて重要な役割を担っている。さらに、「琵琶湖よし笛」のように地域特有の文化財産を取り入れた郷土伝統音楽の発展は、我が国における芸術文化の振興に資するといえよう。これは、次世代を担う子どもたちが学校教育を通じて生まれ育った地域を知り、伝統文化を継承し発信していくことが極めて重要である。

本稿では、複合的なアウトリーチ活動を行い、地域の教育現場が連携して行う音楽活動のあり方として一つのモデルを示した。今後、大学における教育活動の成果を地域社会に発信する取組として、アウトリーチ活動を念頭に置いた実践を検討し、より有効性あるシステムを構築していきたい。

謝辞

「日独親善交流音楽会」の実施に際し、ドイツ・ノイミュンスター音楽学校講師フルート奏者のエルケ・アンダーゼン Elke Andersen 氏、ファゴット奏者のローター・パルマー Lothar Palmer 氏、愛媛大学准教授市川克明氏、よし笛演奏ユニット「ほっとらいん」他、多くのご協力とご助言をいただいた。

また、当該連携事業にご協力いただいた長浜市立杉野小・中学校、社会福祉法人石龍会チャイルドハウス、岐阜第一高等学校の先生方、ご後援いただいた長浜市、長

¹² 藤山あやか、「音楽科教育における鑑賞教材を通じた授業づくりについて - 主体的学びの実現に向けた指導法の提案 -」, 滋賀文教短期大学研究紀要第 20 号別冊 2017, pp. 149-159

浜市教育委員会、長浜市民国際交流協会、ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川、NPO 大津日独協会に深く謝意を表したい。

子ども学科・専任講師（音楽教育学）

参考文献：

原尚志・山中和佳子・木村次宏，「音楽教育アウトリーチ活動の実際と展望－福岡県宗像地区での実践を通して－」，福岡教育大学紀要第 65 号 2016, pp. 1-8

乗松恵美，「音楽によるアウトリーチ実践報告書及びアウトリーチの意義についての考察－公共ホール音楽活性化事業 平成 23 年度 宮城県多賀城公演－」広島文化学園大学学芸学部紀要第 2 巻 2012, pp. 100-122

齊藤豊，「音楽の授業におけるアウトリーチ活動の展開－アウトリーチ活動の目的と形態からみた分類の試み－」，音楽教育実践ジャーナル vol. 10 no. 2 2013, pp. 71-79

柴田實監修他，『滋賀県の地名』（日本歴史地名大系 25），平凡社 1991, pp. 1030-1031

西川嘉廣，『ヨシの文化史－水べから見た近江の暮らし－』，サンライズ出版 2002